

変患者の病態進行の早期発見に有用な可能性がある。

8. 院内がん登録データを利用したコロナ禍におけるがん患者受診状況の分析

がん診療連携課がん登録係

安東 正子 春井 直子
井上 豊子

2020年症例の院内がん登録件数は2,506件、2019年と比べ82件の減少となった。

コロナ禍において、がん患者の受診状況に変化が起きているのかを統計分析した結果を報告する。

整形外科部長より、骨転移での受診者が2020年に入り急増したため、前年と比較した統計の依頼があった。臨床病期で骨転移のあった件数は、2019年50件、2020年79件と増加していた。そこで、がんと診断時、すでにstage IVの患者が増加したと推測、2019年414件17.3%、2020年432件19.1%（脳腫瘍、白血病、その他の造血器腫瘍を除く）であったが、診断のみで精査せず、積極的治療なしとして他院へ紹介した件数が、2019年と2020年で2倍増となったことがわかった。

当院は、感染症病床で中等症患者を受け入れながら、コロナ禍であっても平時のごとく診療を実施する方針を貫いてきたため、がん患者数は大きく減少しなかったと考える。

引き続き、2021年の統計についても、がん治療に影響を及ぼす結果となるのか院内がん登録を実施しながら統計分析を試みたい。

9. 当院における COVID-19妊婦への対応

産婦人科

大前 彩乃 小高 晃嗣
西田 康平 相本 法慧
平田 智子 西條 昌之
西田 友美 河合 清日
中山 朋子 関 典子
水谷 靖司

2019年後半からSARS-CoV-2と名付けられた新型コロナウイルスが世界中に広がり、COVID-19パンデミックを引き起こした。周産期領域でもその影響は多大にあり、当院での自験例を交えて報告する。当院では2020年7月から2021年11月までの間に39名のCOVID-19妊婦の入院受け入れを行った。そのうち治療を要したものは19名、陽性期間中に出産となったものは15名であった。出産15名のうち帝王切開は14例で、その要因としては前期破水や骨盤位などの産科的適応が3例、COVID-19肺炎による母体状態増悪が3例、無症状だが二次感染回避のため施行したものが8例であった。当院でのCOVID-19妊婦への対応策については、関連各科医師、助産師、看護師など多職種によるカンファレンスを経て方針決定を行っている。現在、妊婦も含めた一般の方のワクチン接種普及も進んできてはいるものの、今後第6波の襲来も予測されるため引き続きの感染対策は必須であり、対応策の見直し等は必要だと思われる。

10. 帝王切開後に感染性心内膜炎による急性心不全を合併した一症例

循環器内科

山田 智史 藤尾 栄起
西村 侑太 松本 晶子
飛田 諭志 寺西 仁
幡中 邦彦 向原 直木

心臓血管外科

金光 仁志 毛利 亮

【主訴】

呼吸困難

【現病歴】

30代女性。前期破水と絨毛膜羊膜炎疑いのため当院産婦人科に母体搬送され、入院2日目に緊急帝王切開施行した。術後SpO2低下、胸部レントゲンにて両肺野の透過性低下、労作時呼吸困難を認めためたため当科に紹介となった。

【臨床経過】

ベッドサイドでの経胸壁心臓超音波検査で